



新齋夜語
赤

~ 13
2701
3



伊呂波
2384
3



新齋夜語卷之三

五 岐阜れ老后出離の縁を明屯

濃良波集れ所道にて。くく或景庵よつごん連をたぎ
し作り。庵主いふ十過るばらの危きなり。いさく
ゆゑに庵にて。殊に塵をわしむの法石よ。安島乃。及こ
むとられ。解と。真心僧於のよ。と。並か。い。い。と。捨つ。の
て。や。と。記人。る。なり。連。秀。も。備。し。て。固。よ。な。る。と。
れ。抄。修。し。る。年。よ。一。人。の。恙。穿。れ。宗。通。よ。同。ハ。書。を。れ
い。本。毎。よ。む。そ。咲。よ。る。い。づ。き。と。梅。と。か。く。お。ら。ち。い。とい

つるふの梅といふ字をかて。木毎うて。上よりふまはるるう
中人作らひ。さきそとひを。宗道かいら取らるるう。吾くわが友ともは
ゆりよき。成後なりち或説わさよその事いひゆ。作道さくとも。鑿さく説せつよそ
ふいさううよ入あぶよふむりめよけらひ。むい山風やまかぜと嵐あらしと云
らんとらる。山風やまかぜの嵐あらしの字ふかき。又去のよれやみ爰あや斗とを
子こ松まつよかひるくたんとよあるいよ。松まつよ腕うでをいひける
るご。一首いっしゆれ上の自然しぜん乃なり遠興えんきやうよそ。是こゝ以もつ束たばめてよあるよ
あふれと説れい。満まん座ざいづき。服うふ膺ようの旂はたけよ足あして作しり。
かそくくつられゆんとせ。おろし。あふりいで。兼かね笠かさ
合あはれれののおおりりののいい先先へへか。一人二人のあ乃具なぐたうて。予よは
を。主しゅれれ尼にんんくく。ままぐぐくく。あありりてて晴はれれ成なりりのの富とみくくののぬ
ええととも。古こ稀きのの老らう尼にがが浮う名なももああるるままじじ。昔むかしのの衣いはは只
ひとくく。ささねねううとと。二人ふたり作しるるごご。裁さいるるまま。ままあありりて。
又また火ひ桶づきつつききゆゆささぐぐと。膝ひざららくくららげげてて行いるるよよ。尼にせせつつと。
先まよよををああここれれ同どうりりせせららままじじ。木き毎まいよよむむののああよよつつききくく。
宗道そうどうののおおけけ。ささききととももあありりいいははれれどど。うういいたたくくたたんんれれお
いい千せん載ざい集しゅうのの訂てい正せいももうういいささ成なりりそのの下したららりりささいい入いるる
と有ありり。且かつそののああれれああつつよよ。忠ちゅう家かののいいりりくくいいたたくくととよ
こあこつつとと。くくいいるる成なりりいいけけららめめののとと。尼にははおおりりいいははれれまま
よつよままじじ。尼にううおおけけのの作しらら。ああれれ晴はるる作しららめめのの内うち。説せつりり作しららん

を。主れ尼んく。まぐく。ありて晴れ成り富くのぬ
えとも。古稀の老尼が浮名もあるまじ。昔の衣は只
ひとく。さねうと。二人作るご。裁るま。まありて。
又火桶つきゆさぐと。膝らくらげて行るよ。尼せつと。
先よをあこれ同りせらまじ。木毎よむのあよつきく。
宗道のおけ。さきともありいはれど。ういたくたんれお
い千載集の訂正も。ういさ成りその下らりさい入る
と有り。且そのあれあつよ。忠家のいりくいとよ
こあつと。くいる成りいけらめのと。尼はおりいはれま
よつまじ。尼うおけの作ら。あれ晴る作らめの内。説り作らん

尸につけし私くさぐさ。且い懺悔れら。且い出籠乃縁の
 苦知識とるとし幸にゆくと。らぐらもあまら。尼が出
 生い丹波國れ民の女をり。が十家許れ法凶年お續
 上疫癘流行。父母ららら。ひとまかり。伯母るが許
 又貴きゆらよ。い伯母骨情る。そのそ。つるよ。於の人高
 人より。やり。鴻原とい。依憐町。又賣く。小娘となら
 つ。久。初ら。父母の事。おら。お古。の。一。く。り
 は。う。なり。が。推。さ。い。悪。る。り。の。そ。て。伯。母。又。婿
 よ。あ。れ。花。や。り。る。人。の。お。入。ら。ら。ら。ま。も。も。羨。ま。い。つ。ら
 芝園れ室る。ぬ。娼。乱。の。室。入。る。を。香。よ。深。め。る。ぞ。ゆ。ま。う

と。後。よ。ら。あ。ぢ。お。ら。ら。む。久。偽。く。怪。い。偽。く。無。ひ。も。も。ら
 か。い。と。た。心。付。さ。ら。う。一。夜。城。隈。よ。去。く。か。さ。び。来
 ら。ざ。ら。も。身。さ。け。よ。年。さ。ら。さ。ひ。こ。り。ま。れ。ぞ。訪。り。れ。ぬ。ら
 も。婿。ら。ら。り。或。下。京。迄。ら。海。い。来。く。是。も。一。と。を。許。も
 訓。ら。ら。り。人。の。唐。の。文。字。う。書。ら。ら。う。一。日。童。が。扇。の
 向。う。て。さ。ら。う。一。と。と。ぬ。る。一。巻。き。く。あ。れ。と。い。い。一。紙。
 辞。も。ら。う。も。さ。く。さ。ら。く。と。お。て。ら。ぬ。り。ぬ。園。女。の。よ。む。べ
 と。文。字。さ。ら。ぬ。い。何。と。い。し。半。と。ら。づ。ひ。一。く。一。双。玉。手。千
 人。枕。半。点。朱。唇。万。客。嘗。と。い。し。詩。の。う。い。る。は。半。の。を。ぞ
 と。ア。一。よ。是。い。ぬ。れ。じ。と。遊。女。を。使。せ。ら。は。ら。り。一。双。乃

玉手と云。一對といふはよて。左右のよれらうく。玉との
 づらことと腕も。夜よにうらる浮体。千人の松と云る。ま
 点朱唇と云。うらうらうらうらも。張郎が妻と成。
 李郎が妻と成。万客来て嘗とは能りて。世よは
 猿さのい似城るれば。是を憐て能きる侍なりと。何ら
 ろよ。初てつ付。されむの宿世。おられ結れと。今更さ
 うも。如くと。酒汲らう。お終るごとて。表ふくあ人の
 ぬらよ。ほむく。さいつぐれを。さめく。人とせれるが。士
 農工商れ妻ともる。で。礼義廉恥を忘る。屬と成る
 うと。胸うちふきぐりて。目もあらず。いうう。てう。い。若男と出

く人備よ。ま入べこと。さぬうさぬよ。さひりうせと。女
 乃思夏の白地。ううぐ。ぐさ。幸ふ。かて。ま。い。う。さ
 て。あ。う。ぐ。ぐ。は。て。あ。人。の。事。り。ぬ。る。と。そ。業。也。と。ら。ま。今
 かい。ら。ち。あ。く。き。ぎ。よ。も。梳。ぐ。ま。ど。い。う。ど。あ。る
 ぐら。う。名。を。さ。う。て。對。面。せ。ん。と。い。ひ。う。ら。あ。人。よ。て。
 従。つ。ら。の。の。お。ま。ま。も。あ。る。ぐ。ら。う。う。ら。ひ。ま。が。ま。ぶ。く。よ。出。れ
 ぬ。是。ま。ま。で。ま。る。人。よ。も。あ。ら。び。ま。う。も。田。舎。人。の。あ。つ。う。ま。え
 へ。ゆ。ら。い。と。無。き。も。さ。う。く。よ。酒。宴。も。さ。う。く。ま。ま。入。り。よ。
 松のほらりよ。彼扇のさつる。あ。人。れ。お。き。き。ん。ら。に。
 又胸つぐぬく。お。も。知。な。ま。ら。や。地。さ。れ。ば。奪。り。ん。と。せ。し。を。



いぢりては昔の蹟しそいづらりつたれ。微明が骨法を傳へし。傳の心もあられ海にそそ書され。誰が筆あるたがや。りそそらう。翌朝いそ別き傳へし。夕るさ何ゆたうかの扇を用きし。いづらうらうらうらうら

と書係傳る。誰が志らざうとあふ。和歌のお人の如く。いづらひのそなり。去もも初の傳れつを引く。四大假合れば身をそそ。浮む瀬もあきとそへらも。そく。花女とあまらひ宿世の縁身をそく。さいとのつらり。及もけいも。さうば今より飯のい身を惜まびりて。い

い生死の外に出離せんとそいつらぬ。去ももいづらう人れ心そくやうらうらん。あはる人うあきく。さいをれとあやみくとそ。後いすうそく。二年許らる。式々茶葉。い。今更え出。誰くやとそ。小婿く。びてむ。それらの事とも。後いね。志まびとらう。れぬま。い。と。い人をそ。終のます。このむらり。そのら。長へ約束。年月のさゆき。付られ。い。加紙と。い。へ。移り。ゆりて。初。荆棘林を。一鬼の毒。ね。彼主願。道の。あ。りて。情ふ。く。へ。らり。二十年

許先よとこれたりて後くは方といたりて。及よとある
あり。去よとも古一人の情の如く。夫妻れむしむるは
かまそを方と賜けぬらむとすく。お彼物を去は人も
いるは富世の若志儀よ。わら事よ。導引ぬぬらん
と厚なく志づく。竹まの旦暮よ。回向し。現世るら
い安穩。後世の無上善境とす。あふたりたりと。後世
よ。あふたりたりと。夕園も。月待出ら
ば。んく。いふと。いと。と。契りて。りねとぞ

六 戸田茂睡はましく 草紙讀む

戸田恭光入道茂睡は江都の隠士なりて。和方の近世
左よとも名あり。一年金龍山へ石碑を建

たつれと云々。そり人にも。た乳の山に。踏す云のん
といわ方を彫り。けが。美女の悪女に。教とやらん。或人
竹乳山の。渡河玉の名。不う。く。は。教。吾。天の。あり。や。山
よ。あ。は。び。茂。睡。子。の。風。雅。よ。好。む。ら。古。徳。よ。ら
う。は。な。ど。け。り。こ。り。紙。新。と。告。る。人。も。ぞ。及。り。け。が
え。末。か。ら。事。と。思。り。争。ふ。公。の。さ。り。た。り。せ。ぬ。翁。よ。ぞ。水
笑。し。て。る。ゆ。い。其。は。思。女。子。の。座。も。そ。つ。り。茶
と。ら。ゆ。り。時。第。七。十。三。段。そ。り。た。り。つ。る。方。半。條。い。あ

いることよとての章より取りて、
 うわらうい浮る事、
 む。げふいーおほきとて、
 一こころ半など、
 うつーおせると、
 てもていぬまど、
 せとぬまど、
 一書毎に信せぬ書、
 ぶるべー、
 うくはきい、

一りて人の、
 せんの、
 せか、
 まま、
 や。彼、
 一、
 も、
 肖、
 一、
 一、
 一、

建作らん工料何費用とあるもあり。一人が云はば陰陽の通
 りふも亦作らん其柱数今一本と増てあるは通うより
 まらんとあるあり。彼棟梁と振るるを一むらよ。よとある
 されども。かの園の飛騨屋よとありて。はらと云ふは
 所の背園の柱一本と数とあり。陰陽のどく作らる
 りの法を知らざる工あり。柱一本増はと云ふも。法知れ
 工されば。是より命いぬ。家をくはら及ばずと云ふも。是
 をりて書と考らる書。亦は殊のよと云ふは。人乃か
 もく。比。字。問。工夫も荒らるる。されば。釈迦乃。説。の。よ
 経。ハ。四。九。年。未。顯。真。実。と。自。ら。無。量。義。経。よ。曰。ひ。ぬ。ま。い。

城のよと説らるる。あは。地。獄。天。堂。れ。沙。汰。も。い。ら。ぬ。も。殊
 と。が。一。これ。は。儒。家。の。一。の。新。氏。の。悟。り。ひ。ら。と。よ。本。迷
 へ。ら。る。も。の。我。未。り。一。り。き。後。の。漸。を。守。ら。る。と。い。ふ。を。り。夫
 へ。癩。疽。を。や。む。り。の。水。は。洗。ひ。て。樂。し。ら。る。と。い。ふ。を。り。夫
 唯。癩。疽。を。ら。ん。よ。い。ち。ら。る。と。い。ふ。外。典。よ。も。易。い。ら。る。と。い。ふ。を
 設。て。六。十。四。卦。三。百。八。十。四。爻。と。立。ま。ら。る。も。事。は。ら。れ。も。ま。よ。り。て
 實。を。説。く。不。い。畧。相。付。一。莊。子。が。大。勝。も。魯。純。の。人。を。れ。を
 殊。と。せ。い。大。に。説。り。と。傳。へ。る。吾。朝。よ。ち。く。傳。へ。る。神。代。卷。と
 ても。悉。く。信。せ。む。却。て。惑。の。種。を。ら。ん。され。ば。その。要。を。よ。深
 秘。に。説。と。稱。し。て。痴。人。面。前。よ。ま。を。説。ら。る。い。ち。や。源。氏。物。類



も是又寓言なりて。もてこまぐれとて入るるに及ぶとわらぬとかくごり。
 徹りと思ふと虚偽なりて偽りとなりて実情なり。そ虚実入る
 人人の心は味て。是と甘しとも酸しとも嘗分けくそ善
 と見ていせよといふも横発しそ是よいといふか人半
 と思ひ悪化入るそ夢をぞれども戦兢しく心は自ら省て
 こそ書とある徳とも其のべし。されむけつあくちあつて。抑
 下戸なるべしそ男子へうられと書色ぬまうそんおとこいさうりし
 くかどあく。後と唯を好まざるんよふと書。而茶の長と
 といふ。万れ病の病よりそおこれ。若根を焼く火のどくよそ要
 紙ま。戒を破るあど。む抑揚褒貶の筆法ながら。一方なるべ
 筆をひかす。

書は好む心ある所とて是作りけり紙のよは陽くは倭漢の疑
 書と入る人の。是は実録なりとて。悉く信し。是は戯作なりとて
 捨ん大なる誤りて。泥の濁るをそそ。昔の漢書をそとぬ類本
 べし。門外の聖典の漢を幸へ。何事か明らうに知れぬ事なれば
 且垂てくそ地行軍記なりとそ外推案が筆法とて。その
 かと入るよ。そま偽虚実城備が。あるもの。意趣の在るよ心
 とはあて。縁由。傳は十年の後は生れく。ま其の承れ人。對
 面するに。自ら心も懸つて。あくも忘るる。れ。仮も偽を
 嬌ふ。君子は志るれ。是と吾といふ。あ。あ。ねど。一振。や。は。は
 膠柱の過や。ら。う。ん。何。事。か。今。就。山。ま。ら。山。と。い。つ。ら。う。と。石。刻。

きて建たつとらうとて。れこそは儼げんる人侍しやうらう。是こハ家いへとら乃すなは善ぜん
 知識ちしきをれをいり斗たう悦えつふといふ。其この人ひとを尋もとむ。其こららをいを
 謝あがへ侍しやうんと思おもひて。そは侍しやうを。志しをくらをせんせる人ひとれ趣おもむとあ
 意いのこら又また侍しやうりて。其こハ彼かららとりて。彼かハ武ぶ待たい乳にゆ山の正ただ
 蹟あとと極ごくむ心の文ぶんは侍しやうりて。友ともの名なれり。そは侍しやう乳にゆ山さんといふま。
 それを志しりよめる侍しやうなり。何なにぞいや。此こハ侍しやうとりて。日本にっぽんれ名なの
 可か否ひと侍しやうりや。皆みなを用もちむと知りて。其こ用もちと志しりぬ。頭かぶ志しりや
 と志しり侍しやうりと侍しやうれり。侍しやうをせ席せき上じやうより侍しやう乳にゆ山の碑いしと
 其こは誰たれぞる人ひとも侍しやうらう。其こは面おもての志しり侍しやうらうと志しり侍しやうらう。

新編夜語卷之三



